おおさき中央公民館

郷土史資料展示室へようこそ①

雛祭り ～土人形，菓子皿・菓子型，すし桶

もうすぐ，３月３日のひな祭り（桃の節句）です。そこで今回は，雛祭りに関わりのある展示物，雛祭りの時にも使われていたと思われる展示物を紹介します。

『雛祭り』は，古代中国から伝わった『上巳の行事』と平安貴族の子どもたちの間ではやっていた『ひいな遊び』とが結びついたものです。

上巳とは，３月最初の巳の日のことで，古くから季節の節目には災いをもたらす邪気が入りやすいと考えられていたため，この日に川で禊（洗い清めること）をして穢れ（汚れて悪い状態のこと）を祓う習わしがありました。日本でも古来より，紙や草木で作った人形に，息を吹きかけ身体をなでて穢れを移し，海や川に流すという習わしがあり，中国の『上巳の行事』と合わさりました。今でも『流し雛』の風習としてみられます。

『ひいな遊び』はひいなと呼ばれる紙製の玩具人形を飾って遊ぶことで，人形という共通点から上巳の行事と結びついていきました。16 世紀には，３月３日に雛人形を飾って女の子の良縁を願い祝う日という風習が定着しました。明治６年に新暦が採用されるまでは，旧暦の３月３日（現在の４月頃）に行われ，旧暦では桃の花が咲く季節になるため『桃の節句』とも言われます。

このように『雛祭り』は，様々な背景をもつお祭りです。『お祓い』と『遊び』が融合したものだったのですね。

～土人形から昔の雛飾りを探る～

昭和の初め頃までは，子どもが生れると３月と５月の節句に土人形を贈るという風習がありました。これらの土人形は，今では色があせていますが，作られた当時は，鮮やかに彩色されていました。子供の健やかな成長を願う気持ちが込められていたのですね。

今のような内裏雛も雛壇も，１６世紀には作られましたが，広く庶民にも普及したのは戦後のことです。それまでどのように飾られていたかを地域に残る民芸や風習が伝えてくれます。

鹿児島の『薩摩糸雛』は，雛人形の江戸時代以前の形式（立ち雛）を伝えていて，竹ヒゴ・色紙・麻糸を材料とし，顔がないことと着物の正面に描かれた『垂れ絵』が特徴的です。『紙雛』または『神雛』とも呼ばれ，人形がもともとお祓いの道具であったことを漂わせています。

また飾り方は，杉の葉・竹・砂・石・柴などで山（雛山）を築き，その上に糸雛や土人形を並べていました。階段状の雛壇が広まってからも，雛壇を杉の葉・竹などで囲む風習が残っていて，雛祭りの後それらを片付けることをﾔﾏｸﾔｼ（山崩し）と言いました。

～菓子型・菓子皿・すし桶から雛祭りの食べ物や郷土食を覗く～

菓子型は，いこもち粉やはったい粉にからいも飴を練り合わせた型菓子を作るときに用いられました。砂糖が豊富に無かった時は，砂糖の代わりにからいも飴が使われていました。菓子皿には，型菓子・ヨモギ餅・いこ餅・ふくれなどといったお菓子が盛られていたそうです。鹿児島の混ぜずしは，さつますもじとも呼ばれ，庶民のすしとして親しまれてきました。ちなみに鹿児島の郷土料理として有名な酒ずしは，上流階級武士の豪華なすしです。

雛祭りの食べ物というと『蛤の吸い物』『菱餅』『ひなあられ』『白酒』などが思い浮かびますが，それらの食べ物には，それぞれ由来があります。蛤はその殻が他の貝殻とは決して合わないことから夫婦円満の縁起物と言われています。菱餅の赤は桃，白は雪，緑は新緑を表していて，赤には魔よけ・白には清浄・緑には邪気を祓う意味が込められています。またひなあられも白酒も厄除けと健康祈願の食べ物です。序でながら地域によって味も形も異なるひなあられは，私たちの地域では食べる風習はなかったようです。

雛祭りの食べ物からも，雛祭りがもともと『お祓いの行事』であったことが伝わってきます。

今回ご紹介したものについてや雛祭りにまつわるお話など，ぜひご紹介ください。
（TEL 476-0548 社会教育課）

（薩摩糸雛）

先人たちは身の穢れを祓い，またその時期に身体が必要な要素を食べ物に含ませ体調を改善し，次の季節に備えていました。それに習って，新しい春を迎えてみませんか。